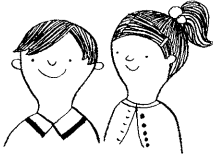


上海⇄東京

子育てメール便(6)



橋本 雅子
津守 多実

まさことたみは東京の養護学校での仕事を通じて知り合った子育て仲間。まさこの子ども愛佳は三歳女兒。たみの子どもクナは五歳男児。まさこ一家が夫、申屠（スンドウ）の出身地である中国上海に転居し、上海の暮らしがスタートしました。さまざまな国の文化をもった親子が一緒に遊ぶ場面について語ります。

たみ 私が住んでいる川崎市と、生活エリアである東京の港区や渋谷区では、さまざまな国の人たちが子育てをしています。国際色豊かな都心の公園に行くと、暗黙の公園ルールにとらわれない活気が

ありますが、親の子育て意識の違いを感じる場合があります。

たとえば砂場。私たちがよく行く都心の公園では、砂場は網で囲われ、子どもだけが砂場において、親は外のベンチに座っています。

親は危険がないように子どもを見ているですが、遊び方に口を出すことはほとんどありません。

その砂場では、自宅から持ってきた砂場道具に子どもの名を書いているのは日本人ぐらいです。誰の道具でも勝手に使い、帰るときにはきつぱりとした口調で子どもに声をかけ、ぐずらせ長引かせることなく、さっさと自分の物だけ袋に入れて持ち帰ります。ここで

遊んでいると、「ありがとう」と子どもに言わせ、砂を払って道具を返し、帰りがらない子をなだめさとしてゐる日本の親の対応が過剰に感じられてきます。

まさこさんが子育てをしている上海はさまざまな国の人が集まっていると聞きますが、一緒に遊ぶ機会などありますか？

上海のデパートの プレイコーナーで

まさこ 先日、申屠の小学時代の担任家族と会食しました。上海在住、八十歳の先生と、シンガポール在住の娘親子（四十歳、二歳男児、上海で結婚）。その友人（中国

女性、国際結婚）は、アメリカ在住で六歳男児、三歳女児のきょうだい連れと、上海出身で他国での生活、育児経験のある顔ぶれです。

子ども同士のやりとりが 親同士のケンカへ

デパートのプレイコーナーで待ち合わせたときのことです。そこには滑り台と大きなボールプールがあり、待ち合わせた家族の子ども以外にも数人の子どもが遊び、愛佳も加わりました。

しばらくして、先生の孫（シンガポール在住、二歳男児）が、中国系男児（二歳半くらい）をつま先で軽く押しながら滑り台を降りていき

ました。日本の公園なら「ゆっくり滑って、押さないで、小さい子だからちょっと待って」と親や子育て仲間が声がけしそうな場面です。祖母と母親は離れた場所で話をしていて、自分の子を見ていません。私は気になりながらも、二人の年も近く、ゆっくりと滑っていたので、黙って見ていました。

すると前にいた中国系男児が泣きたし、見ていた父親に抱き上げられました。近くにいた娘の友人は、録画したビデオカメラを見直して、気づいていません。すぐに奥の休憩コーナーから、着飾った若い母親が泣いた子どもを抱いて、友人に怒鳴ってきました。

彼女はぴんときない様子でしたが、相手は二歳男児を指さし、すごい剣幕です。(おそろく、滑り台を押して危ない、などの発言とあります)。友人も何が言い返し、そこに中国系男児の父と祖母が加わり、さらに様子を察した二歳児の母(先生の娘)が来て言い合います。コーナー担当の店員が間に入ろうとし、先生も自分の娘の胸を押さえて収めようと思いますが、相手も娘も収まらず言い争いになりました。騒ぎを聞きつけ、売り場から店員が何人ものぞきに来て、関係ない周りの親たちも各々言い始めます。十数人の大人たちの口論に、子どもたちも気づき、棒立ち

です。何度も指さされ二歳男児も抱かれたままで泣いています。

席を外していた申屠が戻りました。私「滑り台であおられて泣きだした子どもの母が怒って、言い合いになったの。事情を訳してもらえる?」。彼によると、子ども同士のかかわりの中で泣いてしまふことは、まああること、という友人や、先生の娘の言い分は「ここは中国なんだ」と言い返されているようです。申屠や店員が間に入って、言い争っていた二組が引き離されました。

子どもの遊ばせ方の違い

愛佳と遊んでいた子どもの母

(中国系、フランス人と国際結婚)が、「滑るときに声をかけられたらよかったのでは?」と話してきました。友人は「見ていなかったの」。先生の娘は「私はその場にいなかった」。フランスの人「そうよね、確かに難しい。とにかく、中国の親はとても過保護。私も子どものことでケンカをしたことがある。子ども同士が言い合いになってケンカになったときに、相手の親が私の息子の頭を殴ってきたの。それで、何をやるの!」と親同士のケンカになった。「あまり中国の親とかかわらないほうがいいよ」。

ようやく私はこのケンカが、自

分の子どもを并護する内容から、同じ中国系の親でも、海外在住と上海在住とで、育児の価値観の違いについての口論へとすりかわっていたことに気づかされました。

たみ 子ども同士の小さなぶつかり合いが、親の争いになるとは驚きました。公共の場で、保護者が子を見ている状況で、親が子どもの何を見ているか、どこで親が介入するかについて、どこの国を子育て基盤にしているかでまったく違うのですね。多様な親子が集まる場で、言い争いが起きるといのは当然なのかもしれませんが、十数人の大人のケンカにまでなると過激な展開だと感じます。

日本で、人ごったがえした公共の遊び場でもケンカが起これないのは、子育ての共通認識があるからなのでしょう。それとも、争いを避けているからなのでしょうか。

国籍、年齢、経済層などがさまざまな親子が集まる東京の児童館では、大型の遊具にはたいてい注意書きがあります。小学生向けの遊具には、「小さな乳幼児には大人が付き添うように」。乳幼児の遊び場では、「小学生以上の子は小さな子に注意して遊ぶように」、ほかに、「ボールプールにはおもちゃを持ち込まない、ボールを外に投げない」「ここは何々

する場所です」「飲食はやめてください」などの張り紙があちこちに張ってあります。場の共通ルールを親が認識し、事故やトラブルを回避するためでしょう。

公園などでは、大きい子の親は何かする前に「小さい子がいるから気をつけて」と、子どもにといより、小さい子の親に聞こえるように言い、小さい子の親は、異年齢の子が多数遊ぶ場ではそばにいて、親が見て注意しているということをアピールします。トラブルを避けるマナーですが、子どもの育ちにとっては、そういった声かけがいつも必要だとは思えず、親だけがわかっていればよいこと

でも口にしがちです。

まさこ 上海での育児の共通理解については、まだわからないことだらけです。申屠は蒸し返すのを心苦しく思い、関連した話題を避けたため、友人たちの真意については深くはわかりません。

ただ、今回の出来事は、子どものやりとりが発端でありながら親がさとして子どもが謝ったわけでも、同じ場で再び一緒に過ごせたわけでもなく、親同士が互いに文句を言い合い、物別れに終わりました。大人が子どもの前だからと、取り繕わずに堂々と言い争ったことで、子どもにも事情がわかりやすかったかもしれません。余

計に、どんな体験として子どもたちに残っていくのか、気にかかりました。

以前、孫連れの祖父母が、小公園に別の親子連れが来ると、そそくさと孫を連れ帰る様子を見ました。子ども同士をなぜ遊ばせないのか、と不思議に思っていました。が、今なら、相手との育児の共通理解を前提にしないで、トラブルを回避しようとした行動だと理解できます。

確かに、声高に自分の意見を主張し合うことは相当の労力です。私も疲れていると、慣れない言語と価値観に気を使って大人と話しながら、子ども同士が遊べるきつ

かけをつくる気力がわかず、親子だけで過ごしたくなります。疲れたくないのは生理的には自然な反応ですが、結果として、違う価値観で育つ子ども同士の出会いや、互いの生活世界を知る機会の妨げにもなります。

たださえ、経済格差が表面化している上海の場合、国際的な出会いがある場所に出かけるのは、ある程度裕福な層に限られます。たとえば市場で店番する老人の傍らにいる幼児を見かけても、遊ぶ接点をつくることは日本の商店と違い、かえって不自然に感じます。階級社会の中で育児する現実には直面しています。

たみ 一見、どのような親子も混ざって遊んで見える、日本の公共の遊び場ですが、地元の子が多い公園には、常連の親子がつくり上げた地域のルールがあつて、突出した動きの親子がいて、とても目を引き、いつのまにか暗黙のルールから外れた親子の周囲からは人がいなくなつてゆきます。

文化や経済の違いは子育ての考え方の違いにもつながり、子どもの遊び方や体の動かし方、マナー、言葉遣いなどに現れてきます。同じ遊具を使い、同じ場で遊んでいる子ども同士が出会うのは自然なことです。大人が違いを寛容に受け止め、子ども同士の間で

起こることを、過敏に避けたり争ったりせず、場に共有するにはどうすればよいのでしょうか。

まさこ プレイコーナーで会つた父の仕事でフランスから来た七歳男児は、国際的な出会いに慣れているのか、日本滞在経験の親しみからか、愛佳をごく自然に気にかけてくれました。「中国の親とかかわらないほうがいい」と言つた母親も、自国で子どもたちが友好的に過ごしてほしいと願ひ、親密になれる出会いを求めているのが本音だと思ひます。

言い争ひの後、海外から来た子どもたちは親が親しく話していたせいか、すぐに打ち解けて遊び始

めました。その様子に慰められたのでしょうか、友人たちにも笑顔が戻りました。

子どもが相手に抱く素朴な興味が、親近感へと深まる体験が、少しずつでも積み重ねられてほしいです。そうすれば、初対面の出会いに対して警戒し、身内だけにかわりを閉ざすよつなことが少なくなるのではないのでしょうか。子どもだけでなく、大人にも必要なプロセスと思ひています。

津守 (愛育養護学校、造形アート)

遊びの提案・研究をしている)

橋本 (元愛育養護学校、現在は母親としてクリエイティブ保育を志す)